

私が東京大学企業訪問で最も印象に残った企画は二つあり、ともに一日目のディレクトフォースと企業大学訪問である。

ディレクトフォースではまず初めに、笹川平和財団の理事長である田中伸男氏の基調講演から始まった。IEAは主に石油の消費国側がOPECに対抗するためにヘンリー・キッシンジャー氏の提案によって作られた組織であり、本部はパリにあるとのことだった。田中氏はその組織でアジア人初の事務局長を務められたそう。田中氏の講演の中で特に印象に残ったのは、“石器時代は石がなくなったから終わったわけではない”という言葉だ。サウジアラビアの石油関係者の言葉だそうだが、よく危機感が表れていて、石油の時代の終わりを意識している。私が生まれた時から車はガソリンで動いていて今でも大半がそのままだ。また、石油の価格の下落を一因に、世界経済が低迷していたのも記憶に新しい。この他にもプラスチックの原料になるなどいまでも社会の石油に対する依存度は高い。にもかかわらず終わりを感じているのは、面白くてすごいことだと思った。未来への嗅覚が優れていて、自分もこのことを意識して生活していきたいと思った。もう一つ似てはいるがこの言葉から感じたことがある。それは、エネルギー資源全体が変化しつつあるということだ。世界では今、地球温暖化と福島原発事故の流れを受けて、クリーンで、なおかつ安全な資源、発電方法である自然エネルギーから得られる電気に移行しつつはある。今までの当たり前が当たり前ではなくなりつつあることが感じられた。ゴビテック計画やアジアスーパーグリッド構想といった計画が進められているとおっしゃっていて、その未来も着々と近づいているのだと思った。

そのあとに、ディレクトフォースが行われた。四人の方々から、お話を聞くことができた。一人目は、吉田文一さんだった。吉田さんは、イギリスのもっとも大きな銀行にも勤めたことがあるという方で、一回で、二千万円、五千万円ものお金が動く取引をされていたことがあったそう。お話の中で最も印象に残ったのはふたつあり一つ目は、日本人はもっと自信を持つべきだ、ということだった。吉田さんは、これからの世界の問題は、テロ・地球環境・移民だと考えられていて、このすべてに対処できるのが日本人だとおっしゃっていた。日本が十パーセント経済成長するとミャンマー一国分に相当するそうで、このことは意外で驚いた。また、おもてなしの精神が生き付いている民族は日本人ぐらいだという言葉には、世界中で勤務された経験がある方だけに説得力があった。個人的な意見は、日本人は自分達を過大評価している人がすこし多いのではないのかと考えているが、その考えが少し変わった。二つ目は、二千年の

スペインで物事を考えろという言葉だ。未来のビジョンを持っているかはどうかはとても重要だと感じた。

二人目は、大久保郁子さんだった。大久保さんは、日本財団に所属されていて、留学するための奨学金やフィリピン残留日本人の国籍回復事業を担当されているとのことだった。日本財団は、助成事業を行っていて、現地のNPOなどに資金の援助を行っているそう。特に印象に残ったのは、フィリピンにも残留孤児がいたということだ。日本の国籍の問題はなかなか難しいが、解決してほしいと思う。

三人目は、金子祥三さんだった。金子さんは、日本郵便の民営化に関わったり、コンビニ会社の役員をされたりしていたそう。今は、日本の流通の技術を中国をはじめとする国々に広める活動をされているとのことだった。特に印象に残ったのは、日本についてまず勉強してから世界に出るべきだという言葉だ。

ローカルを知ることで始めてグローバルになれるのだと感じた。

四人目は、酒井英次さんだった。酒井さんは、もともとはヨットの興味があり就職したそうだが、ある時突然その会社でヨットの事業が終わってしまい、海洋政策についての仕事をするようになったそうで、他国と協力して海のルールを作るなどの仕事をしているとのことだった。国ではなくなぜ民間がこのようなことをしているのかというと、国がやろうとするとメンツがあり、協議が進展しづらい（漁業者の反対など）とのことだった。特に印象に残ったのは、健全な海を次の世代にバトンパスしたいとおっしゃっていたことだ。強い思いが感じられた。

このディレクトフォースを通して、国際的に活躍されている人たちの考え方に触れることができた。とても良い経験だった。

企業大学訪問では、東京医科歯科大学附属病院細胞治療センターの森尾友宏教授を訪問させていただいた。森尾教授は小児科医をされていて、また、再生医療についての研究もされているとのことだった。私はこの再生医療についてとても興味を持っていて、訪問させていただくことができると決まった時はとてもうれしかった。森尾教授のお話は興味があることばかりで時間を忘れて聞き入ってしまった。特に印象に残ったことは、2つある。

1つ目は、主に研究についてのお話だ。私は今の時点で、研究医と臨床医の両方に興味があるのももちろん将来に役に立つ内容だった。森尾教授も、小児科の中でも免疫不全を専門にされていて、遺伝的安全性検証系や、微生物検証系キットの開発をされている。この開発で必要になってくることは、生物と化学の知識で、これからは、機械系工学部との連携も必要になってくるそう。ちなみにSONYが同じ建物に入っているそう。研究には資金が必要だという

現実的な一面も持ち合わせていて、資金の主な獲得方法は、論文を書いて文部科学省に評価してもらい、困難な時には、共同で研究するという方法があるそう。一つのしっかりとした研究を大成させるためには、5年はかかるとのことだ。研究をするためには、まず絶対に英語の理解が必要で大学院3年目くらいから本格的にできるようになるそう。また海外に行って、上には上がることや視点の違いについて知るのもよいそうで、中立的、客観的に物事を見れるようになるよう。そこにしかない特殊な病気（デング熱等）を調べに行くのも一つの目標だ。数学が好きなことも必要なのだそう。臨床医としての顔を持ちながら研究もしていられる森尾教授は、2つができるよさについて、モチベーションを保つことができるとおっしゃっていた。一方で、研究面では、研究を専門にしている人と比べて、時間が取れないため、集中して研究しなければいけないとおっしゃっていた。

森尾教授によると、がん細胞の場合、2万3千個ある遺伝子のうち600個ほどは必ず傷つき、がんになるそうで、この変異を見つけることで対策に役立てようという取り組みが行われている。また、がんも日々進化していて、抗がん剤が効かないものもでてきているそう。ATGCの細胞の配列のコピーがおこなわれる際に1万個に1個ぐらいの割合で誤差の範囲内でエラーが起きてしまうそうで、これは、本当のエラーとは別物なのだそうです。この誤差なのか本当のエラーなのか判断するのが難しく、メガバンクで60億塩基対のパターンを今は、50回ほど繰り返し読み込まないといけないため、おおきなコンピューターが必要になってくる。

2つ目は、医師としての気持ちの持ち方についてだ。森尾教授は‘子どものために’がすべての原点になっていて、そのために遺伝子検査などの開発を行っている。確かに子供が幸せな国はそれだけでよい国だと思う。自分の技能を他人のために生かすことが大事だともおっしゃっていた。適性については、人が好きならば良いとのこと。私が医師になりたいと考える理由は人の役に立ちたい、助けたいと思っているからだ。これは幼稚園に通っている頃から変わらない。この原点を忘れずに、これからは、努力を積み重ねて、今回の体験を役立てていきたい。